



# 日本地球化学会ニュース

No. 239      December 2019

## Contents

・ 年会報告	
2019年度日本地球化学会第66回年会実施報告 .....	2
2019年度日本地球化学会第66回年会ショートコース報告 .....	5
・ 学会からのお知らせ	
新会長挨拶 .....	6
Goldschmidt 国際会議 2019 参加報告 .....	7
2019年度火山性流体討論会実施報告 .....	8

## 年会報告

### ● 2019年度日本地球化学会第66回年会実施報告

日本地球化学会2019年度年会実行委員長  
佐野有司（東京大学大気海洋研究所）

2019年度日本地球化学会第66回年会は、9月17日（火）から19日（木）までの3日間、東京大学本郷キャンパスにおいて行われた。東京大学本郷キャンパスにおいては、1977年に不破敬一郎会員が実行委員長となって開催して以来であった。年会初日前日にはショートコースが実施された。年会の日程は、以下のとおりである。

9月16日（月）

第14回日本地球化学会ショートコース

主催：一般社団法人日本地球化学会

会場：理学部1号館東棟2F287室

内容：

田中万也（日本原子力研究開発機構）「私にとっての希土類元素地球化学—アクチノイドの話を少し添えて—」

遠山知亜紀（産業技術総合研究所）「ハロゲンを利用した地球・環境化学」

大野剛（学習院大学）「周期表で考える安定同位体地球化学」

野崎達生（JAMSTEC）「研究者というお仕事とは：地球科学系の研究者を志す貴方たちへ」

9月17日（火）～19日（木）日本地球化学会第66回年会

主催：一般社団法人日本地球化学会

共催：日本化学会，日本分析化学会，日本温泉科学会，日本鉱物科学会，日本地質学会，日本質量分析学会

後援：東京大学大気海洋研究所，株式会社エス・ティ・ジャパン，伯東株式会社，株式会社関東理化，ヤマト科学株式会社，極東貿易株式会社，三洋貿易株式会社，株式会社日本レーザー，サーモフィッシャーサイエンティフィック株式会社，エレメンター・ジャパン株式会社  
会場：東京大学・本郷キャンパス（理学部1号館，山上会館，弥生講堂一条ホール）

懇親会場：カポ・ペリカーノ 本郷店

### 年会開催に向けての準備

#### 開催前年度（2018年度）の準備状況

2017年に、東京大学大気海洋研究所の会員を中心に2019年第66回年会を実施してほしいという要望が届けられ、佐野有司会員を委員長とし大気海洋研究所の会員を中心として年会実行委員会（LOC）を組織することの合意が得られた。当初、大気海洋研究所のある柏キャンパスを会場として開催することも検討されたが、講演会場が3ヶ所に分散してしまうため、参加者に不便を掛けてしまうことが懸念された。そこで、東京大学大学院理学系研究科高橋嘉夫会員に相談したところ、本郷キャンパスでの会場確保にご協力いただけることとなった。2018年5月の理事会において2019年度日本地球化学会第66回年会を東京大学で実施することが正式に認められた。その後、2018年9月12日琉球大学千原キャンパスで開かれた第65回日本地球化学会年会総会の司会を次期開催地の実行委員長である佐野が務めた。

#### 開催年度（2019年度）の準備状況

2019年2月21日、東京大学本郷キャンパスに2018年LOCであった土岐知宏会員，企画幹事丸岡照幸会員，国際文献社佐藤氏を迎え、2019年LOCメンバーである小畑元会員，乙坂重嘉会員，白井厚太郎会員が引き継ぎを行った。引継会議では主に学会とLOCの役割分担の確認，公印の引き渡し，前LOCからの申し送り事項など，メールではできない詳細な打ち合わせを行った。その後，国際文献社からヘルプデスク業務が紹介され，学会開催までのタイムスケジュールを詳細に説明してもらった。今回は大気海洋研究所所属の会員数が比較的多いため，LOCがプログラム編成を担当することとなった。LOCは佐野有司会員，秋澤紀克会員，乙坂重嘉会員，小畑元会員，鹿児島渉悟会員，川幡穂高会員，黒田潤一郎会員，白井厚太郎会員，高畑直人会員，横山祐典会員の10名で組織した。

4月26日，後援企業への出展展示と寄付金の依頼を打診開始した。しかしすでに別の学会に出展を決めている企業もあり，9月は多くの学会が重なるため早めの依頼が大事と認識した。それにもかかわらず最終的には13社から展示，9社から後援金をいただいた。例年に比べてもかなり多くの企業に出展していただくことができた。ランチョンセミナーはサーモフィッシャーサイエンティフィック株式会社，共信コミュニケーションズ株式会社，三洋貿易株式会社の3件で

あった。会員と企業の連携に少しでも貢献できたことをLOC一同喜ばしく思っている。

今回、講演申込のメ切は元々7月18日17時であった。しかし、メ切直前に登録が殺到する恐れがあったため、メ切を7月22日9時に延期することとした。メ切延期の通知は、7月18日午前にメールニュースとして全会員に流した。メ切延長の効果もあってか、特に登録システムに負荷が掛かることもなく、無事に講演申し込みを終了することができた。その後、プログラム編成を行い、8月16日に講演プログラムをWeb上に公開することができた。事前にカード決済で参加登録できない学生には指導教員に立て替えてもらうか、事前料金を当日に支払ってもらうことで対応した。

2019年年会の国際セッションについては、順番として日韓ジョイントシンポジウムを行うこととなった。学会の予算で3名の韓国人研究者を招待し、宿泊費、参加登録費、懇親会費、および国内旅費をサポートした。2018年に韓国で開催された日本質量分析学会・同位体比部会でホストをつとめたSeung-Gu Lee博士、MOU締結先のGeological Society of Korea (GSK)からの推薦でJinho Ahn博士、Sung Hi Choi博士がInvited speakerとして年会に参加していただくことになった。G02（古気候・古環境解析の地球化学）とG06（固体地球の化学とダイナミクス）の2つの基盤セッションを国際セッションとして研究発表が行われた。学会初日の夕食時に、国際委員会のメンバーのお世話で歓迎会を行った。

## 年会会期中の様子

今年度の年会参加者は表1に示した内訳で、総計434名であった。

### 第1日目

会期初日、受付の混乱が生じないように受付担当LOC高畑会員が入念に準備を行ったため、一切の混乱もなく、スムーズに乗り切ることができた。大会初日に学部4年生以下で自分の発表のない参加者は無料

にすることが急遽決まり、すでに参加費を払った人には受付で払い戻すこととなった。学会メールリスト、参加者メールリストに情報を流して周知した。3名の返金希望があり当日申込を含めると16名の学生がこの制度を利用した。

会期初日には、5つの基盤セッションと特別セッション「海洋—大気境界層における地球化学(SOLAS)」の口頭発表が5会場で、7つの基盤セッションと一つの特別セッションのポスター発表が山上会館で開催された。

昼休みにはサーモフィッシャーサイエンティフィックによるランチョンセミナーが開催された。ランチョンへの出席は多少懸念されていたが、LOC白井会員が十分に参加を呼びかけたおかげで、ほぼ満席の客入りで実施できた。

その後も滞りなくセッションは進み、夜間集会の準備はLOC乙坂会員により行われた。夜間集会の今年のテーマは、「日本地球化学会の未来を見据えてII」で、4人のスピーカーに以下のような話題提供をもらった。南雅代次期将来計画委員会委員長が議事進行を務めた。

1. 日本地球化学会の倫理要綱（益田晴恵会長）
2. 出版事業（鍵裕之GJ編集委員長、小畑元地球化学編集委員長）
3. 総合討論：地球化学の将来について（鍵裕之次期会長）

特に「倫理要綱」については大いに白熱した議論が行われた。夜間集会は、会員のオープンな議論ができる貴重な場であることを改めて認識した。このような集会にはなるべく多くの会員が参加することが望ましい。今後は、多数の学生会員にも参加してもらい、幅広い意見を述べ合う場になることを期待している。

### 第2日目

会期2日目には、4つの基盤セッション、特別セッション「地球メタロミクス」の口頭発表が5会場で、7つの基盤セッションと一つの特別セッションのポス

表1 2019年度第66回日本地球化学会年会参加者

	正会員	共催 学会員	一般 非会員	学生 会員	学生 非会員	名誉 会員	50年 会員	出展 企業	学部生	高校生 等	合計
事前登録	145	4	32	68	64	3	2	27	3	0	348
当日登録	32	3	16	6	16	0	0	0	13	0	86
合計	177	7	48	74	80	3	2	27	16	0	434

ター発表が山上会館で開催された。昼休みには共信コミュニケーションズによるランチョンセミナーが開催された。13:00から総会が始まるため、ランチョンへの出席者数は多少懸念されていたが、2日目も十分な参加があった。

総会は弥生講堂一条ホールにて開催された。メイン会場からやや距離があるため移動に時間が掛かるのではという心配もあったが、特に混乱もなく時間通りに議事が開始された。司会は次期年会実行委員長である野尻幸宏会員が務め、用意されていた議事が粛々と進められた。韓国からの招待講演者のSeung-Gu Lee博士からも挨拶をいただいた。

総会後には安藤厚会員、長沢宏会員に名誉会員証が授与された。また今年も、島田允堯会員、田中剛会員、平林憲次会員が50年会員として顕彰された。続いて、奨励賞並びに学会賞の発表へと進んでいった。日本地球化学会奨励賞は尾崎和海会員（東邦大学）と窪田薫会員（JAMSTEC）の2名であった。日本地球化学功労賞は上岡晃会員に授与された。日本地球化学会賞には川幡穂高会員（東京大学）、平田岳史会員（東京大学）の2名が選ばれた。また、柴田賞は兼岡一郎会員に授与された。各賞授賞式に続き、奨励賞、学会賞、柴田賞受賞者による記念講演が行われた。ほぼ満員の会場で、それぞれの受賞者が個性溢れる研究発表を行い、会場を沸かせた。また、受賞講演者の協力もあり、ほぼ時間通りに講演会を終えることができた。

懇親会は本郷キャンパス医学部研究棟13階にあるレストラン、カポ・ペリカーノ 本郷店で行われた。懇親会の参加者は185名（内訳は表2を参照）であった。

懇親会場が離れているため当初は18時30分より開始する予定であったが参加者が速やかに移動され待ちくたびている人が散見されたため、やや時間を早めて懇親会を開始した。LOC黒田会員の司会のもと、LOC佐野委員長の開会の挨拶を皮切りに、河村知彦東京大学大気海洋研究所長による歓迎のあいさつ、さらに益田晴恵会長による開会によせての一言、そして田

中剛50年会員による乾杯の挨拶があった。会場には、後援企業の宣伝広告や大気海洋研究所のプロモーションビデオを流した。懇親会の中ごろには、50年会員、名誉会員、各賞受賞者からお言葉を頂戴した。当初はやや会場が手狭ではないかという危惧もあったが、始まってみると参加者が懇談を楽しめるちょうど良い大きさであった。例年に比べると参加費がやや高めであったが、皆さんに十分に楽しんでいただける料理・飲み物を提供できたと考えている。歓談も盛り上がり、LOC一同にとっても喜ばしい懇親会となった。最後は、恒例の次期LOC委員長野尻幸宏会員からご挨拶と次期開催地の弘前の紹介をいただいた。弘前大学における年会の魅力を存分に語られ、懇親会参加者の次期年会に対する期待も大いに高まった。鍵裕之次期会長の閉会の挨拶をもって、無事に懇親会を終了した。

### 第3日目

前日の懇親会も盛り上がったため、早朝のセッションの出足が心配されたが、問題なく三日目も始めることができた。4つの基盤セッションの口頭発表が3会場、6つの基盤セッションと特別セッション「地球メタロミクス」のポスター発表が山上会館で開催された。昼休みには三洋貿易によるランチョンセミナーが開催された。3日目も十分な参加があった。これで3日間のランチョンセミナーも無事に実施することができた。

3日目のポスター会場も多くの参加者で賑わった。今年のポスター会場はスペースに余裕があり、企業展示、ポスター発表も適切に配置され、うまく研究交流の場を提供できたのではないかと考えている。

事務局では丸岡照幸企画幹事とLOC白井会員を含め複数名の学会理事が閉会式直前まで学生発表賞の集計に追われた。学生発表賞は今年度から全学年の学生会員を対象に学生優秀賞を、修士課程までの学生会員には学生奨励賞を授与することとなった。本年度は、学生優秀賞（口頭発表）は岩佐義也会員（東北大学）、平川祐太会員（東北大学）、宮本千尋会員（東京大学）、八木晃会員（東京工業大学）の4名に、学生優秀賞（ポスター）は浦井暖史会員（信州大学）、平尾萌会員（茨城工業高等専門学校）の2名に、学生奨励賞（口頭発表）は中林賢一会員（学習院大学）、長澤真会員（東京大学）、名取幸花会員（東京大学）、和田壮平会員（北海道大学）の4名に、学生奨励賞（ポスター）は佐藤妃奈会員（学習院大学）、武井祐太会員

表2 懇親会参加者

	一般	学生	企業	招待	合計
事前登録	95	42	12	14	163
当日登録	13	2	7	0	22
合計	108	44	19	14	185

(学習院大学)の2名に授与された。益田晴恵会長、佐野有司LOC委員長から表彰状、副賞の学会ロゴ入りマグカップが手渡された。最後に、次期LOCを代表して野尻幸宏会員からメのあいさつがあり、無事に2019年度日本地球化学会第66回年会は閉会した。

## 謝 辞

年会開催にあたり、日本化学会、日本分析化学会、日本温泉科学会、日本鉱物科学会、日本地質学会、日本質量分析学会には本年会を共催していただきました。また、東京大学大気海洋研究所からは後援をいただきました。ありがとうございました。

年会運営にご協力いただいた益田晴恵会長、丸岡照幸企画幹事、板井啓明庶務幹事、横山哲也国際関係幹事をはじめ、学会理事の皆様、セッション構成にご尽力いただいたコンビナーの皆様にお礼申し上げます。

会場の準備におきましては、東京大学理学系研究科高橋嘉夫会員、事務補佐員の松倉志信さんにたいへんお世話になりました。この場を借りて感謝の意を表します。

また企業後援で年会財政を支えていただいた各社のご芳名を掲載し、お礼申し上げます。

株式会社エス・ティ・ジャパン

伯東株式会社

株式会社関東理化学

ヤマト科学株式会社

極東貿易株式会社

三洋貿易株式会社

株式会社日本レーザー

サーモフィッシャーサイエンティフィック株式会社

エレメンター・ジャパン株式会社

(以上、9社)

企業展示に参加していただいた以下の13社のご協力で、年会は一層盛り上がり財政基盤も安定しました。ここに記してお礼申し上げます。来年度も年会へのご協力をどうぞよろしく願います。

株式会社エス・ティ・ジャパン

伯東株式会社

株式会社マイクロサポート

紀本電子工業株式会社

極東貿易株式会社

三洋貿易株式会社

アメテック株式会社カメカ事業部

株式会社日本レーザー

サーモフィッシャーサイエンティフィック株式会社  
九電産業株式会社

昭光サイエンス株式会社

株式会社環境総合テクノス

共信コミュニケーションズ株式会社

(以上、13社)

最後になりますが、東京大学での第66回年会が滞りなく完了できましたこと、参加いただいた皆様の協力のおかげと、心より感謝申し上げます。来年の第67回年会は弘前大学が会場となります。第67回年会にも多くの会員にご参加いただき、日本の地球化学がますます発展することを祈念しております。

## ●第14回日本地球化学会ショートコース報告書

2019年9月16日(月)に東京大学本郷キャンパス・理学部1号館東棟2F287室にて第14回ショートコースを開催した。受講者は、学生15名(うち本学会員12名)、一般5名(本学会員4名)、講師5名の合計25名であった。

今年のショートコースの内容はプログラム(下記参照)にあるように国際周期表年にちなみ周期表を意識した研究を進められている研究者に講演をお願いした。各講演は質疑込みで80分を充てた。午前開始で十分な時間を充てられたことで、講演後の議論も盛り上がったように思う。

会場準備、設営及びHPでのお知らせ等、日本地球化学会年会LOCの方々にお世話になった。ここに感謝の意を表します。なお、各講師の講演要旨はショートコースHPに引き続き載せている。これまでのショートコースは世話人を中心として進められてきたが、本年度より地球化学会・企画幹事が引継ぎ、講師選定、開催案内、参加費徴収等行うように変更した。

日本地球化学会・企画幹事 丸岡 照幸

以下にプログラムと会計報告を記す。

## 2019年日本地球化学会ショートコース プログラム

講師の先生方と講演タイトル

10:30-10:40 丸岡照幸(筑波大学・地球化学会企画幹事)

イントロダクション：国際周期表年一周期表の発見から150周年を祝してー

10:40-12:00 田中万也(日本原子力研究開発機構)

「私にとっての希土類元素地球化学—アクチノイドの話を少し添えて—」

12:00-13:20 昼休み

13:20-14:40 遠山知亜紀 (産業技術総合研究所)

「ハロゲンを利用した地球・環境化学」

14:50-16:10 大野剛 (学習院大学)

「周期表で考える安定同位体地球化学」

16:20-17:40 野崎達生 (JAMSTEC)

「研究者というお仕事とは：地球科学系の研究者を志す貴方たちへ」

## 会計報告

収入は参加費のみである。本ショートコースの参加費は、日本地球化学会学生会員は無料とし、その他は2,000円とした(9名分回収：一般5名、学生非会員3名、丸岡)。

支出は、講師料(一人あたり10,000円)、4名分であった。講師料は田中会員、遠山会員、大野会員、野崎会員の4名に支払った。

収入			支出		
人数	単価(円)	小計(円)	人数	単価(円)	小計(円)
9	2,000	18,000	4	10,000	40,000
日本地球化学会から補助		22,000			
合計		40,000	合計		40,000

## 学会からのお知らせ

### ●新会長挨拶

日本地球化学会 会長 鍵 裕之

2019年9月19日の理事会の議決により、益田晴恵前会長からバトンを受け、会長を拝命いたしました。本来でしたら総会でご挨拶を申し上げるところでしたが、法人の手続きにより会長選任が総会の後となりましたため、失礼いたしました。既に学会ホームページ、メールニュースにてご挨拶申し上げましたが、改めて紙面にてご挨拶させていただきます。本学会は一般社団法人として3年目を迎え、学会運営は概ね順調に進んでおりますが、1000人規模の学会を代表する重責を感じております。もとより微力ではありますが、本学会のさらなる発展に向けて努力をしております。皆様のご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

今期の学会執行部は、副会長の益田晴恵 会員、南雅代 会員、庶務幹事 飯塚毅 会員、総務幹事 板井啓明 会員、企画幹事 服部祥平 会員、広報幹事 角野浩史 会員、国際幹事 横山哲也 会員、会計幹事 浅原良浩 会員、会員幹事 大野剛 会員、地球化学編集長 小畑元 会員に加え、13名の理事(太田充恒 会員、川口慎介 会員、鈴木勝彦 会員、高野淑識 会員、張勁 会員、角皆潤 会員、寺田健太郎 会員、土岐知弘 会員、奈良岡浩 会員、原田尚美 会員、日高洋 会員、福士圭介 会員、藪田ひかる 会員)が各幹事をサポートするチーム制を組み、学会の諸問題に取り組んでまいります。お気づきのこと、ご意見などはお近くの理事メンバーにお声がけください。また、監事は今期から2名体制となり、蒲生俊敬 会員に加えて山本鋼志 会員にお願いすることになりました。

学会活動の要は年会と学術雑誌の発行にあると私は考えております。記憶にない会員も多くいらっしゃると思いますが、2007年までの本学会の年会は、「海洋」、「岩石・地殻」、「地球外物質」、「堆積物」、「生物」、「大気・降水」、「陸水」、「生物」、「有機物」、「環境」、「熱水・温泉」に分類される一般講演に加えて、開催地ごとに企画される課題講演で運営されていました。2008年に東大駒場キャンパスで開かれた年会運営を、私はLOCメンバーの一人としてお手伝いしました。長年親しまれてきたこれらの一般講演の分類を一新し、当時の評議員メンバーの方々とも相談しながら30を越す個別セッションを提案し、学会外の方も積極的に参加しやすいように工夫をこらしました。その甲斐あって駒場年会は500人以上の参加者を記録しました。駒場年会から既に干支は一巡し、そろそろ次の仕掛けを考える時期に来ていると考えております。個別セッションにすることで学会外の研究者も招き入れてより深い議論ができる反面、セッションが細分化され、分野横断的な話題を議論する余裕がなくなったというデメリットもあるかもしれません。詳細はこれから皆さんと議論しながら進めていきますが、分野間の相互作用を意識したセッションを新たに立ち上げることを含め、年会の改革を進めていきたいと考えております。地球化学は地球惑星科学のコミュニティでは「横串」の学問で、本学会には研究対象や手法が異なる多様な研究者が在籍しています。この多様性を活かし、そして我々の強みとし、学会外の研究者も招き入れながらより活発な年会としていきたいと思っております。

2020年の年会は弘前大学で開催されます。東北地

方で年会が開催されるのは2000年の山形大学以来20年ぶりとなります。弘前年会ではこれまでにない、いくつかの工夫をこらす予定です。多くの方々が参加され、活発な年会となることを期待しております。

学術雑誌の動向も近年大きく変化してきております。かつてはGeochemical Journalは冊子体の発行を基軸にしてきましたが、既に会員の方々の多くは電子媒体で購読されていることと思います。しばしば若手研究者から「Geochemical Journalはどれだけの研究者に読まれているのでしょうか?」という質問を受けます。オープンアクセス論文であれば出版と同時に世界の研究者が目にすることができますが、どのような国・地域の研究者が冊子体を購読しているのか、という情報を正確に得ることは難しいのが現状です。完全オープンアクセス化も視野に入れつつ、Geochemical Journalの今後のあり方を、この2年間で丁寧に考えていきたいと思っております。和文誌地球化学も変革が必要です。冊子体として届く和文誌は、多くの会員が母国語で読める学術雑誌として、そして会員と学会を結ぶ媒体としてきわめて重要な位置づけをもっております。一方で、年4冊の雑誌の発行と発送を維持することは編集面でも財政面でも負担が大きいことも事実です。1996年までは地球化学は年2号の発行でしたが、1997年から年4号の発行となりました。号数を増やした理由は印刷媒体として発行していた学会ニュースを地球化学と合冊し、Geochemical Journalと同時に配送することで発送費を節約するためでした。現在は緊急性の高い情報は電子メールやインターネット経由で瞬時に伝えることができますし、多くの会員はGeochemical Journalを電子購読していますので、20年以上前に地球化学を年4冊に増やした理由はもはや現在は存在しないこととなります。もちろん年4冊に増やすことで、さまざまな特集や企画が増え、誌面が活性化されたという大きなメリットもあります。地球化学の発行形態も良い方向に改善していきたいと考えております。

今後の学会の在り方など、会員の皆様からの忌憚なきご意見をいただければ幸いです。これから2年間、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

#### ● Goldschmidt 国際会議 2019 参加報告

2019年の第29回 Goldschmidt 国際会議は、8月18日(日)から23日(金)までの6日間にわたり、スペイン・バルセロナ市で開催されました。本会議は、

ヨーロッパ地球化学連合 (European Association of Geochemistry: EAG) と米国地球化学会 (Geochemical Society: GS) が主催、日本地球化学会やその他の関連学会が共催する国際学会で、地球化学関連分野では参加者数が最大規模の学会です。会場となったバルセロナ国際会議場は、市内中心部から地下鉄やトラムで10~15分でアクセスでき、裏手にはビーチが広がり、周囲にはショッピングモールや数多くのレストランがあるなど、便利な立地でした。約4100人に及ぶ参加者数は、2017年のパリ、2013年のフローレンス開催に次ぐ過去3番目の盛況ぶりとなりました。うち、学生の参加者は全体の32%を占めており、今回を含めて近年のヨーロッパ開催の同会議においては学生を含めた多くの若手研究者の熱意が感じられます。

今回の本会議は、基調講演をのぞく14に区分されたテーマのもと121セッションで構成されており、個々の一般講演は、例年とほぼ同様に午前8時30分~午前11時45分、午後14時30分~17時30分の口頭発表と、午後の口頭発表終了時間となる17時30分から約2時間がポスター発表のための時間として設定されていました。加えて、午前の口頭発表の直後に共通セッションとして月曜日から金曜日まで日替わりで約一時間の基調講演が一件設けられていました。また、今回、新たな試みとして、2208件のポスター発表の中から希望者に対して会場内に設置されたブースにて4分間の口頭発表をおこなう「フラッシュトーク」の時間が設けられました。公式発表されたデータとして、投稿されたアブストラクトは総数4032件、内訳として、基調講演5件、口頭発表1916件、フラッシュトーク479件、ポスター発表2208件となっています。

会期中に各賞表彰等がありました。日本地球化学会に関連するものとして、今年のGJ論文賞はYoshida, K., et al. "Micro-excavation and direct chemical analysis of individual fluid inclusion by cryo-FIB-SEM-EDS: Application to the UHP talc-garnet-chloritoid schist from the Makbal Metamorphic Complex, Kyrgyz Tian-Shan" vol. 52 (No. 1), pp. 59-67 (2018) でした。同論文の筆頭著者の吉田健太会員に対して益田晴恵会長から賞が授与され、受賞講演が行われました。また、佐野有司会員が2019 Geochemistry Fellowに選出され、授賞式が行われました。

日本地球化学会では、毎年、本会期中にブース展示を行い、学会ロゴの入ったボールペンやクリアホル



ダーを無料配布し、また、本学会会員が関係する国際研究集会・学会・セミナー等のチラシ、パンフレットによる告知などの広報活動を行っています。本ブースには、日本人参加者のみならず、海外からの参加者に訪ねてきていただき、情報交換や待ち合わせの場としても利用していただいています（写真参照）。

来年は米国ハワイ州ホノルル市内のハワイコンベンションセンターにて6月21日～26日に開催予定です（<https://goldschmidt.info/2020/>）。例年より2か月ほど早い時期の開催となりますが、奮って参加しましょう。

（広報委員 Goldschmidt 会議担当 日高 洋，  
広報幹事 三村耕一）

### ● 2019年度火山性流体討論会実施報告

この度、日本地球化学会「鳥居・井上基金」の助成を受けて、2019年度火山性流体討論会を開催しましたので報告します。火山性流体討論会は、年に1度開催されており、火山性流体（火山ガス・熱水・マグマ・超臨界流体・地下水など）を対象とした地球化学やその周辺分野の研究を行っている学生や若手研究者が、それぞれの研究について時間をかけて討論する場です。そのため、研究発表については、1人当たりの時間を長くとり、話題提供中でも随時質問を受け付けるセミナー形式を採用しています。毎年、2泊3日の合宿形式で行われています。

本年度の討論会は、栃木県那須郡にある研修施設「なす高原自然の家」で、10月18日～20日の日程で行いました。参加者について、学生が15名、若手研



写真① 集合写真 「なす高原自然の家」のロビーにて



写真② 口頭発表の様子

究者が6名、中堅以上の研究者が4名、会社員が2名の総勢27名（うち、地球化学会員は8名）でした。また、学生の中には北海道、山形、福岡といった遠方からの参加もありました。研究発表について、口頭で13件、ポスター形式で6件が行われました。

今年度も発表の多くは地球化学的研究でした。活動的火山（草津白根山、霧島火山群、箱根など）の火山ガスや温泉水の化学組成・同位体組成を用いた火山活動度の推定及び火山熱水系についての研究や、変成岩や火山岩などに含まれる流体包有物の化学組成を用いた地下深部での流体活動についての研究などがありました。この他、放射性炭素年代測定についての解説などのレビュー的な発表もありました。また、地球化学以外にも、蔵王火山における噴出物の岩石学的研究、草津白根山周辺の地下構造についての電磁気学的研





写真③ ポスター発表の様子

究、新燃岳の火山灰を用いた記載岩石学的研究、せん断流中の気泡の合体条件に関するシミュレーションなど様々な研究発表がありました。このように、アプローチや研究対象は多少違えど、主として火山性流体についての研究であるため、参加者からは多くの質疑があり、活発な議論が起っていました。ほとんど全

ての発表が1時間を超えるものとなりました。発表後も個別に討論がなされており、深夜まで続いていました。特に、学生や若手研究者にとって、自身の研究についての改善点を認識し、理解を深める良い機会になったと感じています。

巡検として、茶臼岳の噴気においてガス採取の見学を行いました。10月中旬ということもあり、山は風が強くなり肌寒く感じました。火山ガスの採取法について、気象庁気象研究所の谷口研究官に説明を交えながら実演をしていただきました。参加者は、噴気でのガス採取の様子を写真に撮ったり、使用されている試薬や器具に施された工夫についてメモを取るなど熱心に見学していました。火山ガス採取の様子は、ほとんどの参加者にとって初見であり、良い機会になったのではないかと思います。

最後に、日本地球化学会の鳥居・井上基金は、遠方からの参加学生の交通費補助に使用させていただきました。参加者や宿泊施設の職員など多くの方々の多岐にわたるご協力があって、2019年度火山性流体討論会が開催できたことを、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

外山浩太郎（東京大学 大学院総合文化研究科）

### ニュースへ記事やご意見をお寄せください

地球化学に関連した研究集会、書評、研究機関の紹介などの原稿をお待ちしております。編集の都合上、電子メールでの原稿を歓迎いたしますので、ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2020年3月頃を予定しています。ニュース原稿は来年2月までにお送りいただくよう、お願いいたします。また、ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者（日本地球化学会広報幹事・ニュース担当）

太田充恒  
〒305-8567 つくば市東1-1-1  
産業技術総合研究所地質情報研究部門  
Tel: 029-861-3848; Fax: 029-861-3566  
E-mail: news-hp@geochem.jp

角野浩史  
〒153-0041 東京都目黒区駒場3-8-1  
東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻  
Tel: 03-5454-6741; Fax: 03-5454-6741  
E-mail: news-hp@geochem.jp